

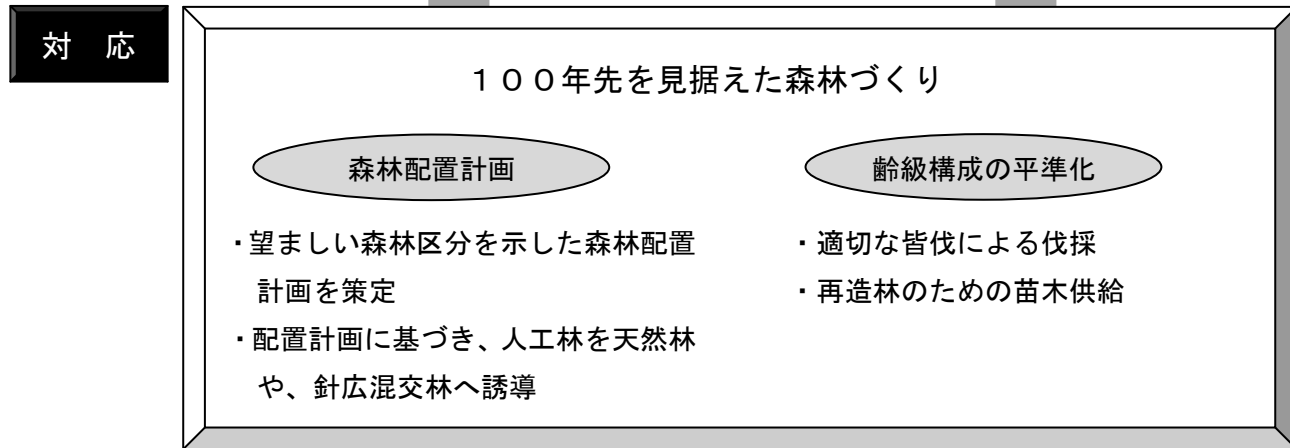
100年先の森林づくりのシミュレーション（案）について

現 状

- 戦後の拡大造林により植栽されたスギ・ヒノキの人工林が、本格的な利用期を迎えている。（46～50年生がピーク）
- 一方、25年生までの若齢林が全体の6%と偏った林齢構成となっている。
- 木材生産量は年々増加傾向であるが（H26年度 民有林：32.1万 m³/年）、毎年約180万 m³ ずつ増え続ける森林蓄積量から考えれば、森林資源を活用しきれていない。

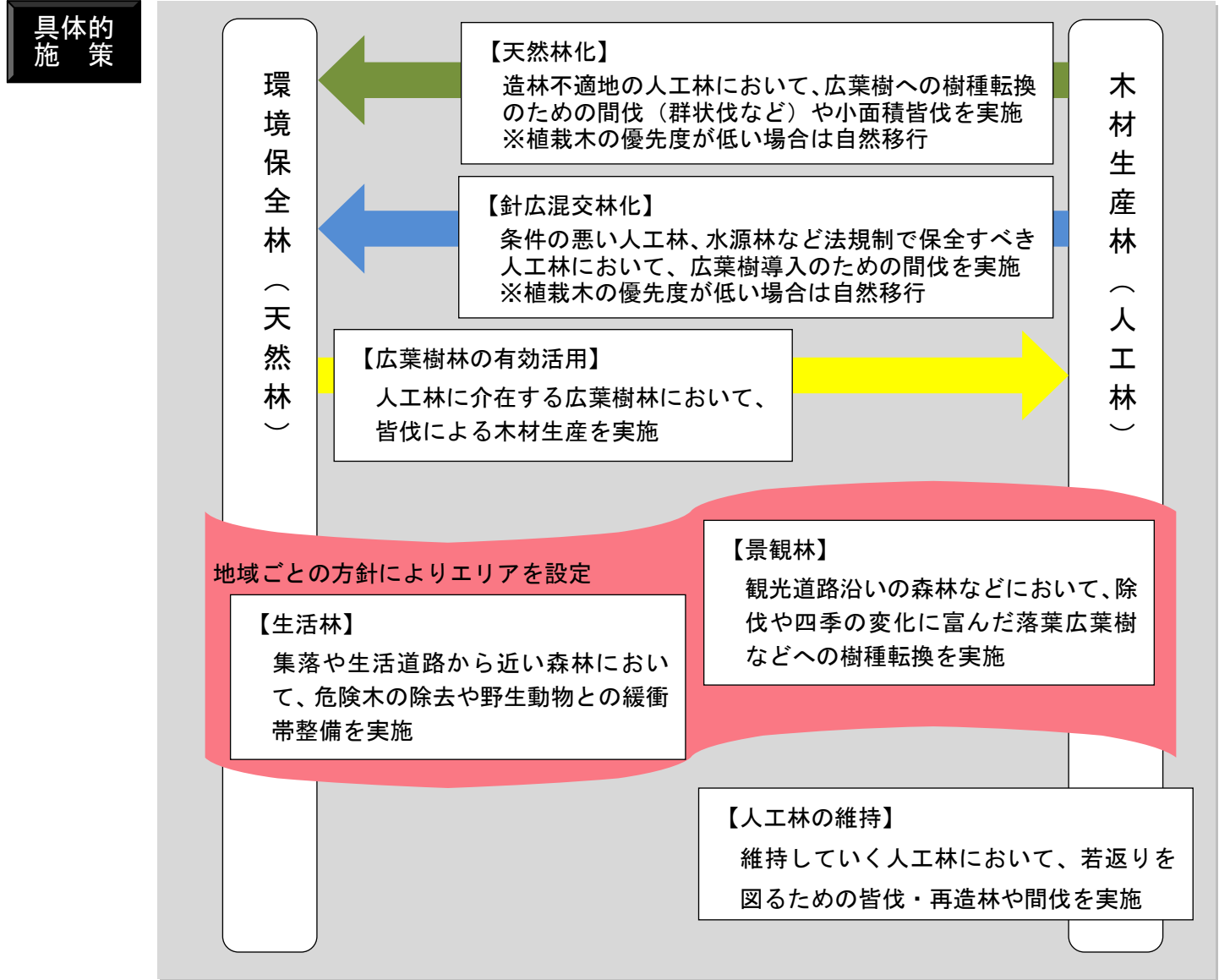
課 題

- 木材生産に適さない地域にまで植栽された人工林を見直し、気象や地形などの諸条件から、本来あるべき森林の姿を考える必要がある。
- 森林の少子高齢化が進行する中、若返りを図らなければ、将来的に持続可能な林業経営や、公益的機能の発揮が困難となることが危惧される。



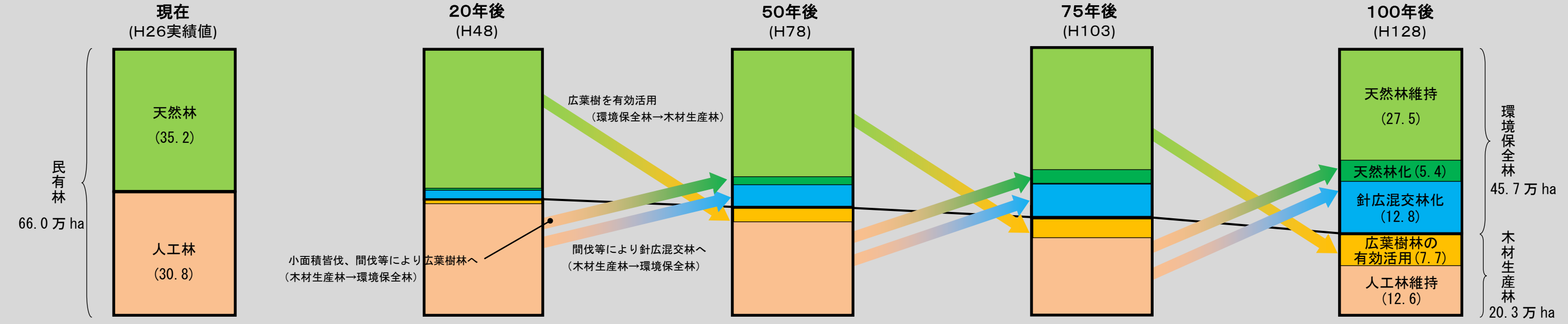
試 算

<p>現在の人工林30.8万 haのうち、保全すべき森林など12.8万 haを計画的な皆伐や間伐によって環境保全林へ移行することが可能。</p> <p style="text-align: right;">【図Ⅰ】</p>	<p>人工林として維持していく森林の齢級構成は、100年後に平準化が図られている。</p> <p style="text-align: right;">【図Ⅱ】</p>	<p><総評></p> <p>100年後の民有林66万 haの構成は、環境保全林45.7万 ha、木材生産林20.3万 haとなっており、木材生産林は縮小するものの現在の木材生産量の約2.8倍を生産することが可能。また、地域毎の方針によって生活林（4.3万 ha）、景観林（2.7万 ha）が指定され、地域住民の環境保全や観光価値といった新たな視点による森林整備が行われていることにより、林業と環境との共存が図られた森林となっている。</p>
<p>100年後の木材生産林では、年間90万 m³の木材生産が可能。（人工林：70.6万 m³、広葉樹林の有効活用：19.4万 m³）</p> <p style="text-align: right;">【図Ⅲ】</p>		

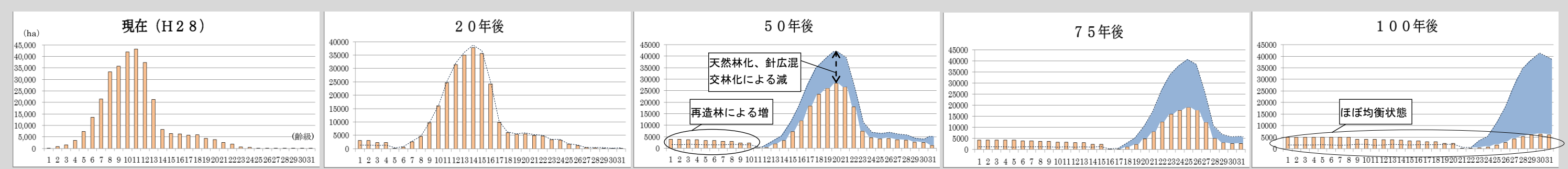


100年先の森林づくりシミュレーション（案）

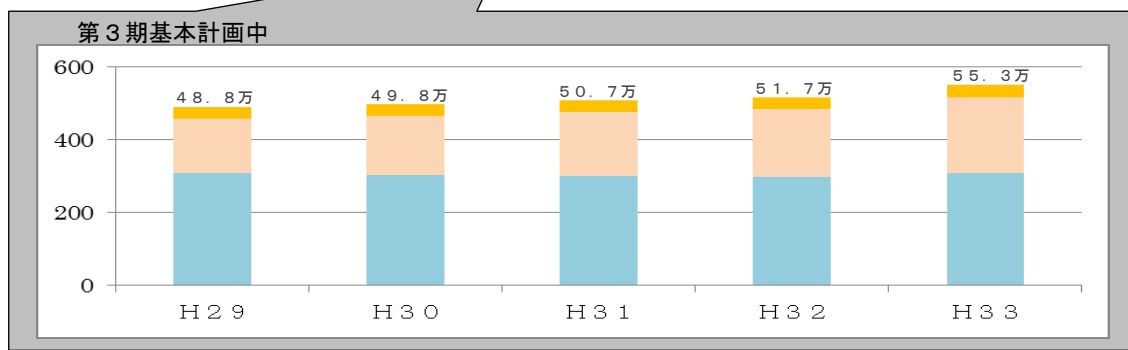
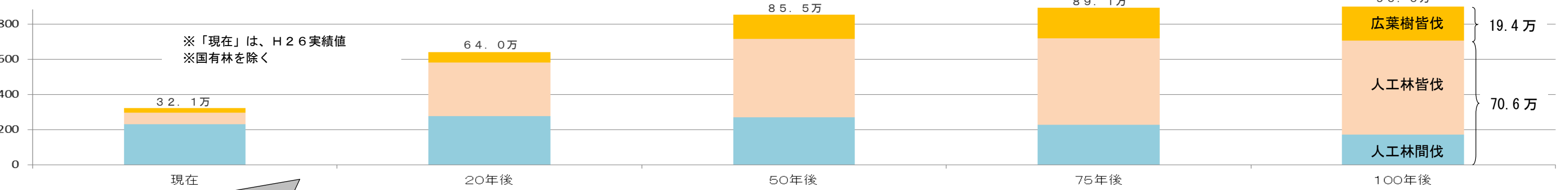
【図Ⅰ】 森林移行面積



【図Ⅱ】 人工林の齢級別構成



【図Ⅲ】 木材生産可能量 (m³/年)



【図Ⅰ】 (1) 造林不適地の人工林は、間伐、小面積皆伐、自然移行により広葉樹林へ移行 → **天然林化**
 (2) 急傾斜や道から遠いといった条件の悪い人工林や水源林など法規制で保全すべき人工林は、間伐や自然移行により針広混交林へ移行 → **針広混交林化**
 (3) 人工林に介在する広葉樹林は、皆伐により木材を有効活用 → **広葉樹林の有効活用**
 ⇒ その結果、100年後の本県の民有林66万haの構成は、環境保全林45.7万ha、木材生産林20.3万haとなる。

【図Ⅱ】 100年先まで維持していく人工林では、皆伐、再造林により、齢級構成の平準化が図られる。

【図Ⅲ】 ①森林移行のための皆伐、間伐、②人工林の齢級構成平準化のための皆伐、③人工林を適切に維持・管理していくための間伐によって、100年後には、現在の木材生産量の約2.8倍(90万m³/年)を生産することが可能。